

寄宿舎事件

教師への不満が爆発！前代未聞のストライキ

当時の授業は西洋文化の直輸入であり、それを平気で教育の定立とする教師の無責任さに生徒の不平・不満はたまっていった。

明治26（1893）年11月3日、寄宿舎の生徒が校庭で発火演習をし、翌日の代休を願い出たが許可されなかった。演習の疲労と一部教師への不満が爆発し、生徒たちは授業をさぼり、4日深夜に騒ぎ出した。制止した教員に石を投げつけ、消防用の手押しポンプを放水するなどし、河内校長は寄宿舎生徒全員の退去を命じた。生徒たちは学校の東方の豎小路の宿屋に分宿し、団結を誓い合った。

寄宿舎生徒は全員退校処分となり、これに同情した通学生も除名処分となった。事件解決のため、文部省参事官の岡田良平が派遣され、文部局の菊池謙二郎が赴任した。三浦梧楼（予備役陸軍中将）が仲裁に入り、処分を受けた生徒の復学が認められた。



三浦梧楼

これで一旦事件は収束したように思われたが、河内校長が約束した教員の転職が守られなかったため、生徒たちは再ストライキに踏み切った。「馬耳東風」戦術を使い、ノートも鉛筆も持たず教室に入り、黙って座ったまま授業を受けた。学年末には、大学進学を控えた上級生がストライキをやめるように主張しはじめたが、そのうちに約束の教員もみな転出し、生徒の全勝に終わった。なお、この事件の責任を負い河内校長は辞職した。

こぼれ話

夏目漱石『坊っちゃん』の舞台は愛媛ではなく、山口だった!?

『坊っちゃん』の舞台は愛媛県松山市の中学校だが、実は山口県だという説がある。明治26年の山口高等中学校での寄宿舎事件は、東京・大阪の新聞に大きく報じられた。この事件の十数年後に、雑誌「ホトギス」で『坊っちゃん』が発表されており、作品内のバツ騒動のヒントになっているというのだ。

実は、夏目漱石は山口高等中学校赴任を4度も断っている。明治28年、愛媛県立尋常中学校へ赴任直前に山口高等中学校に赴任したばかりの菊池謙二郎から誘いをうけたが、松山行きの先約があるといって断った。寄宿舎事件解決のため、山口高等中学校に派遣された文部省参事官の岡田良平も漱石を誘ったが、山口には来なかった。こういった関わりから、漱石は事件の経緯について知っていたと思われる。

ちなみに、岡田は『坊っちゃん』の作中人物「赤シャツ」のモデルとも言われている。